



図書館業務の中での工夫

田中 浩章

I. はじめに

神戸労災病院と、図書室、そして、図書館業務の中での工夫について紹介していきます。当院図書室をさらにより良い状態にできるような工夫として何ができるのだろうか和図書室担当者として考える機会に直面すると、その度に、筆者は手作りの物品を用意してきました。そういった経験からくる蓄積もありまして、この記事の文章の方向性としては、それらの紹介にもなっています。

II. 当院について

1. 神戸労災病院（図1）



図1 神戸労災病院

当院は、独立行政法人労働者健康安全機構が運営する医療機関の1つ。兵庫県の神戸市にある、中規模な病院です。六甲山のふもとの豊かな緑を背景とし、神戸港や市街を見下ろす高台に位置しています。

たなか ひろあき：労働者健康安全機構 神戸労災病院 総務課（図書室）

当院駐車場の出入り口付近には、クスノキがあります。とても大きくて立派な木です。ここに当院が建つよりも前から植わっていた木なのですが、現在は病院のシンボリックな扱いになっています。

電車の最寄り駅は、新神戸です。

病院理念の「良質で心のもった医療を働く人と地域のために」のもとに、院内では糖尿病教室と呼ばれるミニ講座を実施しています（毎月一回）。院外でも医師による健康市民講座を開催しています（不定期）。

2. ロッサくん（図2）



図2 ロッサくん

ロッサくんは、当院専用の公式マスコット・キャラクターです。当院の看護師がデザインし、当院の医局秘書が命名しました。キャラクターのメインのモチーフは、サイです。神戸労災病院→労災病院→ローサイ→サイ、という訳です。とぼけた印象を受ける顔で、親しみやすい感じ。身体は、ずんぐりむっくりしているが、愛らしい外見です。

耳は、看護の温かさと看護の象徴であるナイ

チンゲールの灯を表しています。尻尾は、病院のシンボリックな存在で、同時に市民の木でもあるクスノキです。当院から送られる A4 サイズの封筒には、このロッサくんが印刷されています。また、当院の売店では、ロッサくんのさまざまなグッズが売られています。しかも、時々新商品が追加で並べられていたりします。その人気は、かなり高いようです。



図4 掲示物の例

Ⅲ. 当院の図書室 (図3)



図3 当院の図書室

当院図書室の蔵書数は以下のとおりです。

- ・累計蔵書数 (和書) : 約 4,000 冊
- ・累計蔵書数 (洋書) : 約 800 冊
- ・所蔵雑誌累計 (和雑誌) : 63 タイトル
- ・所蔵雑誌累計 (洋雑誌) : 58 タイトル

常設パソコンは2台 (インターネットを利用可能)。図書館のシステムは、自作 (FileMaker Pro を使用)。

Ⅳ. 図書館業務の中での工夫

図書館業務に携わるようになってから、この場合の対応策ならこれがあればもっと良いのに、という状況を、私はこれまでも何度か経験してきました。そして、ないのであれば手作りしてしまえば良いという発想になりました。この後の文章では、その手作りした物品を紹介していきます。

1. 掲示物 (図4)

利用者には図書室に親しみをもってもらいたいので、当院の図書室内の各所にロッサくんを

掲示するようにしました。ドアや、壁、図書の貸出コーナー、返却コーナーに貼ってあります。

これは、画像データを紙へ印刷、ラミネート加工、ハサミで切って作成した物です。ロッサくんの画像は複数ありました。ロッサくんではあるのだけれど、違う衣装の物だとか、違うポーズをとっているだとかで、掲示物も色々作ることが可能になったのです。作っては貼り、作っては貼り、を繰り返しました。

現在、当院図書室に居る限りは、ロッサくんの掲示物が視界のどこかに入ってきます。意図的に、そういった状態にしたのです。どうにも余裕がない、そんないっぱいいっぱいの状態にあっても、ロッサくんのとげけた顔を眺めると、何だか心が癒されます。かなり忙しくて大変な時であっても、ロッサくんの顔を眺めることで、少しだけ落ち着くことができます。もちろん、その効果は、どの数字にも直接表れはしないと思います。けれど、これはこれで、けっこう大事なことなのではないかな、と個人的には思っています。

2. 案内表示板 (図5)



図5 案内表示板の例

どこの図書室であっても、図書や冊子体の雑誌が配架された書架には、利便性の向上のために何らかの案内表示をしていると思われます。それがあった方が、どこに何があるのかが認識しやすくなるからです。しかし、その案内表示が完全に固定されていて書架と一体だと、表示変更が必要になった際に差し替えがしづらいという困った事態になってしまいます。そういう訳で、差し替えは、やはりできた方が良いでしょう。

当院の図書室は書架が金属製なので、案内表示のためにマグネットシートを加工した案内表示板を使っています。これだと、表示の差し替えがかなり楽にできるのです。

作り方は簡単。市販のマグネットシートを用意して、テプラであらかじめ印字しておいたテープをマグネットシートの上に貼ります。その上で、ちょうど良いサイズに切断して、形を整えてやります。たったそれだけで完成するため、作成の際に特に難しい作業は発生しません。切断できる道具が既に手元にあるなら、材料さえ揃えられれば、気軽に作ることができます。

こうして作った案内表示板は、金属製の書架の任意の場所・任意の位置に、磁力でピタッと貼り付けられます。配架場所や位置を入れ替える際、表示を入れ替えなければならなくなったりした時や、別の場所に移動させたい時に、この案内表示板は効果を発揮します。剥がすのも簡単だし、気に入らなければ何度でも取り外してまた貼り直せます。そういう部分でとても都合が良いので、便利だと思っています。

3. 配架シミュレーション (図6)

図書館業務をしていると、書架に配架してある紙の雑誌を、その時おかれていた状況に応じて移動させたい時が、どこかの時点で確実に出てくると思います。その動かさなければならぬ物の量によっては、かなり大変な作業になります。当然、時間も長くかかってきてしまう。それなのに、早くしてほしいとせつつかれてしまったりして、すぐにやらなくてはいけなく

和N-2 日本臨床	和Q-X 心Aでわかる肥満と糖尿病	和R-7 臨床泌尿器科
和N-4 日本職業災害 医学会雑誌	和N 内科	和R-1 臨床放射線
和N-X 日本整形外 科学会雑誌	和N-X 日本労働衛生 学会雑誌	和R-2 臨床老年看護 学
和N-XX 日本呼吸会 雑誌	和N 日本内視鏡 外科誌	和R-3 臨床検査
和P-X アトピー性 皮膚病	和N 日本皮膚 科学会雑誌	和R-7 消化器内科
		和R-10 臨床麻酔
		和R-11 理学療法ジャーナル
		和R-12 臨床整形外科
		和R-13 臨床皮膚科

図6 配架シミュレーションの例

なってしまう。しかし、余裕が無い状態での作業は、厄介な結果を招き寄せてしまう場合がある訳です。

考え無しに作業をしていくと、ろくでもない事が起こりやすくなります。移動させた先の書架に、紙の雑誌がどうしても上手く収まってくれなかったり、別の書架に雑誌の束がはみ出してきたり……そういう状態になると、かえって後々の修正に手間がかかってしまいます。

当院図書室では、書架の紙の雑誌（冊子体のバラの物や、製本した物）を移動させる際には、実行に移す前に必ず事前準備をするようにしています。

準備の前に、必要になる物をあらかじめ用意しておきます。書架の配架可能なスペースの枠組みを模したデザインで印刷した紙を用意しておきます。エクセルなどで作ると良いでしょう。可能なら、その紙はフィルムで挟んでラミネーターでレトルトパウチして板にしておいた方が良いでしょう。丈夫になります。それと、雑誌タイトルをあらかじめ記載してある、付箋。主に使うのは、これだけです。種類が多くなれば、その分、用意するにはけっこう手間がかかるかもしれません。しかし、用意をしたらすぐ利用、という風な状況でないのであれば、時期をずらしておくことは可能だと思います。普段、余裕がある時に作成しておいて、実際に使う時にさえ間に合えばそれで良いと思うからです。そして、一度作ってしまえば、今後は何度も流用し

ていくことが可能になります。

分量によっては、冊数の多い場合や逆に少ない場合もあるので、付箋の長さや枚数は、それに応じて調整します。量が少なくあまり場所をとらないと考えられる雑誌に対しては、ハサミを用いて付箋を短めに切っておく訳です。貼り付けたり剥がしたりして、配架のシミュレーションを実施します（Microsoft Publisher というソフトを使って並びを考える時もあります）。色々と検討を重ねた上で、その後に、実際に配架をしていくという流れです。配架の作業においては、事前にしたシミュレーションがある程度の目安になってくれているので、かなりやりやすくなっています。配架位置や分量で悩むことが少なくなるのも、都合が良いです。

場合によっては、図書や雑誌を移動させるための力仕事に、本来の部署の外から協力者が現れる時もあるとは思いますが、例えば、仲の良い部署で人手が確保できて手伝ってもらえるような状況ですね。その場合においても、あらかじめこのシミュレーションをしてあることにより、配架先や移動先がはっきりわかっているのは、やはり強みとなります。目標とするイメージは既に視覚化されているので共有しやすいし、だからこそ分業もしやすくなります。作業が円滑に進んでくれます。

一応、当院図書室ではそういったやり方をとっていますが、必ずしも別にそれに縛られる必要はありません。例えば、用意さえできるのであれば、はじめからそれらをホワイトボードやマグネットシートで作っておいて、その上で配架のシミュレーションをやってしまうのも有効なやり方だとは思いますが。

4. ボックスファイル (図7)

ボックスファイルという便利な物が存在します。私はそれを、文房具の通信販売のカタログで見かけて知りました。もともとは書類やファイルを整理して収納して机の上などに置いておく物のようです。これは図書室でも役に立ちます。バラバラだと薄くて自立しない冊子体雑誌



図7 ボックスファイルの活用例

を収納して書架に配架しなければならない際に、使える訳です。

しかし、一般向けにされているボックスファイルは、そもそも元々は書架に合わせて作られた物ではありません。そのため、実際に雑誌の収納配架に利用してみようとしても、横幅によってスペースが余ったりします。細かい部分での調整は対応しきれないのです。

そこで、私は、段ボール箱を材料にして、ボックスファイルに準じる物を自作することにしました。市販の物と自作の物を組み合わせて、雑誌を収納し配架していく形を目指す訳です。それは現在、ある程度うまくいっています。

現在、図書室の書架で収納配架に使っているボックスファイルには、市販のものにも自作のものにも、年ごとや、半年ごとに仕切りを設けて、見出し（印刷した紙をラミネート）を貼り付けておいてあります。数字の部分は、あらかじめ抜いた形にしてあるのです。そこに黒いホワイトボードマーカーで、上から文字を書き込む訳です。これにより、文字は状況に応じてこすつ

て消して別の年にできるようになります。こうしておけば、古い雑誌を廃棄して新しい雑誌を並べる際に、ボックスファイル自体は既にあった物を流用し、記載を変更して対応できるようになります。とても便利なのです。

5. 電子ジャーナルのマニュアル (図8)

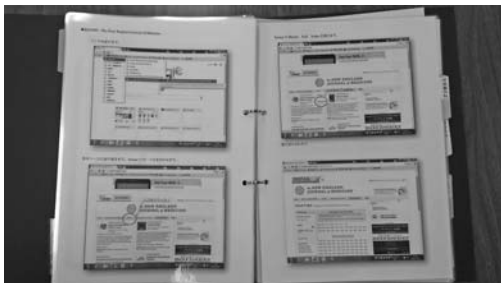


図8 電子ジャーナルマニュアル

電子ジャーナルは、保管のために新たに場所をとれない場合や、すぐに記事を読みたい場合に便利だと思います。しかし当院では、長年電子ジャーナルの必要性を感じつつも、その導入には慎重でした。紙の雑誌の方が、手に取りやすく読みやすいというのもありましたし、医師の先生たちの慣れの問題もありました。そのため、実際の導入までにかかなり時間がかかっていたように思います。何度も会議が開かれ、業者から説明を受けたりする中で、次第に合意が形成され、それを受けて会計課が契約して、ついに導入の運びになりました。それが三年前のことです。それ以降、当院ではパソコンのブラウザで電子ジャーナルが閲覧できるようになりました。

利用できるようになってからしばらく経ち、図書室の担当者が電子ジャーナルについて、医師の先生や研修医から質問を受ける回数が少しずつ多くなってきました。閲覧利用する際には、インターネットにアクセスしてブラウザ上で対応するページを開き操作をしていく形になります。ですが、病院では複数の電子ジャーナルの契約を結んでいるので、ページによっては異なる操作が要求される場合が出てきてしまう訳で

す。それは、管理をしている会社が違うからでした。

これでは色々と読み比べてみたい場合などに、各ページにおいての操作に慣れていない利用者ほど困ってしまいます。そういう時に、ページごとの操作手順を解説したものが紙媒体であらかじめ用意されていれば、何かと都合が良い。眺めながら操作をたどれるので、迷わなくて済みます。そういった理由から、マニュアルがあれば良いと思うようになりました。

そこで、当院の図書室では、試行錯誤を繰り返しながら、契約している電子ジャーナルを閲覧するための手順をまとめた手作りのマニュアルを作成しました。

作成のために、まず担当者が電子ジャーナルの閲覧ページを画面上で操作していく様子を、スクリーンショットでひたすら撮影しました。そして、それを画像としてワードのファイルに貼り付けていきます。画像の説明の文章を入力する訳ですが、注意しなければならぬところも目立つように気を配ります。注意書きや、下線、矢印、とげ吹き出しなどを画像の上や文章内で、強調させておく訳です。

紙に印刷してみましたが、印象として、このままファイルに綴じても強度が保てないと思われました。そこで、ラミネーターにてレトルトパウチしてしまおうという発想になりました。作業自体は難しくないのですが、あっという間に丈夫な板になります。その後で、左側に二カ所ずつパンチで穴を空けておいて、ファイルに通してまとめれば良い。その方針を立てたので、淡々と作成していくことができました。

V. おわりに

図書室の担当者として図書館業務を続けていて、それなりに経験を積めるだけの時間が経過してくると、自分のかかっている図書室に対して、どうも微妙に感じる事柄が出てきます。それは実は、きつとずっとその状態だったんです。でも、それまではその存在にすら気づけな

かった。図書館業務をやりはじめた当初は、余裕が無かったから気づけなかったのだと思います。

しかし、そうであったとしても、どこかの時点で気づきます。もちろん、早い遅いはあるとは思いますが、何かの問題点に気づいてしまう。それは、その図書館業務の仕事にある程度慣れたからこそ、少し余裕が出てきて、周りを見回すことが可能になったからこそ、気づけた。成長したからこそ、気づくことができたんだと思います。

なぜこれはこんな状態のままずっと来たのか？もう少しどうにかできなかつたのか？色々な受け止め方があるとは思いますが、しかし、もしも誰かの仕事を引き継いで後任になって図書館業務についての形だったとすれば、前任者だって、たぶん知っていた。知っていたけど、それをどうにもできなかつた訳です。そういう意味では、何だかちょっと手強そう。

でも、それはチャンスかもしれない！改善さえできれば、図書館がより良い状態になるだろうと予想されるからです。もしかすると、図書館担当者一人ではできないかもしれません。うまい解決策も思いつけないかもしれない。けれど、そんな時、思い出してください。近畿病院図書室協議会には、同じ経験をした先輩が居るかもしれません。質問してみてもいいかでしょうか？

さて、筆者は今回、この記事で、これまでこんな品を手作りしてきました、というのを延々と列記してきました。筆者は、病院図書館の業務の中で何か欲しい物を考えた時に、こういった工夫ならできそうだな、とか、こういった品さえあれば改善できる、とか、そういった考え方がなった際、どういう訳か結果として工作ばかりしていく形になったのです。記録として、どうとらえれば良い物なのかは、正直よくわかりません。万人に必要とされる類の事柄ではないと思います。でも、この記事の原稿が悩んでいる誰かのヒントになるかもしれない。そう思って執筆をしていきました。

筆者は、もともと手を動かしたり、工作したり、何かを加工して別の形にしたり、そういったことが好きでした。だから、その工作の作業は苦ではなかつた。とても楽しかつた訳です。しかも、自分がそれを形にしたことで、それまでなら存在しなかつた物が、図書室の中に置かれることになった。それは、既製品のように綺麗な出来でもなく、また、ものすごく丈夫な作りという訳でもない。でも、自分で作り出した実用品です。見るたびに少し誇らしくなるし、愛着もわきます。やる気次第で装飾を付け加えることもできます。もちろん、さらなる改良だってできるでしょう。それにより、図書室が少し良くなるのだとすれば……それって、とても良いことだと思いませんか？